

脳腫瘍臨床病理カラーアトラス 第4版

日本脳腫瘍病理学会(編)

若林俊彦, 渋井壮一郎, 廣瀬隆則, 小森隆司(編集委員)

日高病院日高病理診断研究センター長/群馬大学名誉教授

中里洋一

気迫のこもった最新の標準アトラス

日本脳腫瘍病理学会の編集による『脳腫瘍臨床病理カラーアトラス』が第4版へと改訂された。WHOが2016年5月に脳腫瘍分類、いわゆる「ブルーブック」(WHO Classification of Tumours of Central Nervous System)を第4版改訂版として出版したことを受けての大改訂である。一見すると大きな変更はないように見えるかも知れない。それはこの第4版が第1版(1988年)、第2版(1999年)、第3版(2009年)と続いた本書シリーズの伝統をしっかりと受け継いで作られているからである。すなわち、A4判上製本の書籍であり、原則見開きページで1腫瘍型が完結しており、厳選された見応えのある写真を大きく掲載しており、本文は簡潔で明快を旨としている、等々である。しかし、一歩内容に踏み込んでみると本書が4名の編集委員の並々ならぬ熱意により、緻密に計画された完成度の高い書物であることがわかる。

まず、著者が第3版の63名から99名へと大幅に増員されている。日本脳腫瘍病理学会の中核メンバーに加えて若手研究者を大幅に登用している。いわば学会の総力を挙げての著作であると言っても過言ではない。若手研究者の積極的な参加は、本書に新しい息吹を与えるとともに学会としての人材育成にも効果があると考えられる。本文の総論では脳腫瘍病理の歴史、新WHO分類、グリオーマの分子遺伝学、免疫組織化学が述べられ、現在の脳腫瘍病理の立ち位置が明確に示されている。

圧巻は各論であり、本書のタイトルが示すごとく臨床と病理が協力しながら脳腫瘍の多彩な腫瘍型の特徴を美しいカラー写真とイラストを用いて見事に示している。全ての腫瘍型において臨床医と病理医が共同執筆を行ったことは従来の版には

ない特色であり、臨床的にも病理的にも弱点がなくバランスの取れた内容となっている。組織像を示す写真の大きさは類例を見ず、例えばタイトルの腫瘍名のすぐ下に配置された大きな写真はそのページの1/3ほども占めるサイズであり、その腫瘍の最も典型的な組織像を圧倒的な迫力と説得力でもって見事に表現している。読者はページを繰るたびに脳腫瘍の多彩な組織像をあたかも万華鏡を見るごとく満喫することができるであろう。本文の記述は簡潔にして十分であり、必要な情報を素早く読み取るのに適している。特に「光顕所見」の記述は組織像の特徴を適切に表現しており、「分子生物学的知見」はやや専門的で深い内容になっている。一方、従来の版に比べてマクロ写真は著明に減少し、電子顕微鏡写真は数もサイズも小さくなっている。これは良くも悪くも現在の脳腫瘍病理学が置かれた状況を端的に表現しているものといえよう。

脳腫瘍の診断・治療の現場では組織型と遺伝子異常の情報が最も重要である。本書は脳腫瘍の現場で参照するのに最適な構成と内容を持った標準アトラスである。またこれから脳腫瘍の病理を学び、脳腫瘍臨床に携わろうとしている若い病理医、脳外科医にとっては最適の教科書といえる。本書がわが国の脳腫瘍の臨床と教育に極めて有益な書籍であることを確信している。



●A4/頁232/2017年
定価：本体 19,000 円 + 税
[ISBN978-4-260-03047-2]
医学書院 刊